

『星は亂れ飛ぶ』 (十卷)

帝キネ 芦屋映畫

紹介 第七十三號

帝キネの大作品なる事、誰しも認する映畫である。原作は「主婦の友」に連載された沖野岩三郎氏の小説で、帝劇歌劇部出身の山根千世君の半生を描いたものだそうであるが、讀りかしては、大して新味はないが、寧ろありきたりのものである。原作は知らないが、伊藤大輔氏の脚色は可成り好く映畫化して居ると思へる。殊に最初の出發點と最後のクライマックスに於て作者が云ふ。氏の監督はやはり出發點が好く、中程は稍々冗長さを感じた。最初の象徴的舞踏と最後の「星は亂れ飛ぶ」の舞踏の前後のシーン等は行き届いた監督振りを見せて居た。カフエーの場面は金をかけたに係らずその氣分を出し得ず正に失敗であつた。俳優は頗る振はずその性格を出し得たのは高堂氏の明位なもので、他はほとんど適役ではない。澤蘭子嬢のみ

代は無難だが、後半に於るウツク振りなど全然失敗に終つて居る。松本泰輔氏の富井も決して氏の得意の役ではなく、演、難く相だし、又有難くない。セツトは全く従來の帝キネには見られない立派なものでこれ丈でも大作品の値打はあると思はせた。河上勇喜氏の撮影は相變らず美しく殊に劇のスタートから一、二巻の間にご贅澤な染調色と共に外國映畫と比較して更に遜色のない出来であつた。總觀して蒲田映畫「灼熱の戀」に匹敵すべき映畫で眞面目な意味では、(寫眞版紹介號)

(九月廿七日 大阪青邊劇場封切) 山本綠葉